
プリキュアオールスターズDX 3 Revival 導いて！幸福の成す奇跡

桔梗 刹那・F・セイエイ シルバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
プリキュアオールスターズDX3 Revival 導いて！幸福の成す奇跡

【Nコード】
N1030Y

【作者名】
桔梗 刹那・F・セイエイ シルバー

【あらすじ】
プリズムフラワーを巡る激闘から数ヶ月後、雨牙真夜「キュアセイバー」の前に現れたのは、存在だけで世界を滅ぼす力を持つ最強の敵！そのとてつもない威力に、彼女は最大の危機を迎える。そして、その敵を追い、23人のプリキュアたちに別世界から三人の「天上人」が姿を現す。彼女たちに導かれ、プリキュアたちが足を踏み入れたのは、誰も知らない未知の領域だった！新たな冒険とともに、伝説の戦士の最後の戦いが始まる！その敵の名は……」

幸福
『。』

最初の挨拶

みなさん、おひさしぶりです。桔梗です。

2011年11月1日日本日、この度遂に私は最後の作品を執筆することを決意しました。

思えば私にとって記念すべき小説第一作「プリキュアオールスターズDX2NEXT 新たな伝説 銀河最大の超決戦！」（以下「DX2NEXT」）を執筆してから早いもので一年が経過し、その後も「仮面ライダースカルVSキュアムーンライト」「プリキュアオールスターズDX2THE LAST 光と闇 最後の戦い！」（以下「DX2THE LAST」）「真プリキュアオールスターズ！」「花妖 蒼い追憶」 「Cure Rebellion episode: Blood」といった計六作の作品を書いて参りました。

しかし、筆者として小説を書く限界というものを徐々に感じていき、本作を最後に筆を置くことを決めました。これまで私の作品を読んできてくださいましたみなさんにはたいへん申し訳ありませんが、私は悔やんでいません。本作完結後は普通の読者に戻り、みなさんの作品を楽しませていただく次第です。

さて、本作は私の小説第一作と第三作「DX2NEXT」「DX2THE LAST」の続編で、また刹那・F・セイエイ氏作「プリキュアvsプリキュア」との競演作品コラボという形にもなっている刹那氏ともう一人、シルバー氏も含めた三人による共同企画作品であります。なので初めて読む方は先述した三作品を先に読むほうをお勧め致しますし、むしろそうしたほうがより本作を楽しめると思います。

一応来年（2012年）3月17日公開予定の映画「プリキュアオールスターズ 最新作（仮）」ファイナルまでの完結を目指しています。

最終作に相応しい作品になるように全精力を入れて頑張ります。

長い本文を最後まで読んでいただき、ありがとうございました。
それでは、本作を最後までごゆるりと、お楽しみください。

プロローグ

「また・・・、別の世界へ飛ぶの？」

そう、茶の色をした短髪の少女は目の前の少女に問いかける。『また』という言葉に紫のツインテールの少女はつい苦笑いを浮かべると、仕方なさそうに首を縦に振る。

「うん・・・すぐに来てほしいって『彼女』から緊急に連絡が入ったの。しばらく『この世界』を留守にするわ」

「・・・あのさ、だったら私も・・・っ!？」

『一緒に行こうか?』と言葉を続けようとした口を人差し指で閉じられ、短髪の少女は少しだけ狼狽の色を浮かべる。少女の口を封じたツインテールの少女はそつと指を離すと、その口から漏れるはずだった言葉の問いに答える。

「悪いけど、今度はあなたを連れてはいけない。今度の出張は私もまだ詳細を聞いていないの。もしかしたら長引くかもしれない。もし、あなただけを連れて行ったら、『夢原のぞみ』キョウトリームがまた頬を膨らませるでしょ?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『夢原のぞみ』の名を出され、短髪の少女は黙らざるをえなくなる。というのも、今『夢原のぞみ』は自分がそばにいて支えてあげないと精神が崩壊寸前にまで追い込まれる・・・は大袈裟としてもそれに近いギリギリの状態を保っている。自分以外にも彼女を支えてくれる人はいるのはいるが、万が一暴走に至ったら、誰か止められるだろうか。短髪の少女はほんの少しだけ思考し、いないと結論を出す。もはや『夢原のぞみ』の中で自分という欠片ピースが不可欠となっている。彼女が暴れたら、張り手を食らわせてでも自分が抑えなくてはならない。

とはいえ、『この世界』が地獄に変わらなければ、『夢原のぞみ』もああならなかったはずだ。

しかし、現実はいつだって自分たちの目に嫌になるくらい焼きつける。

この地獄では、自分たちは世界の敵と人々に認識させられていた。かつての栄光が一体どうしてここまで転落していったのか、それは被害者の自分たちも知りたい。世界中から敵と仕立てられた自分たちはいつしか『世界破壊派』と『世界守護派』に分かれ、仲間同士で戦いの火蓋が切られ、現在も続いている。これから先も醜い争いが続くことが確実の中、自分までが一時とはいえ地獄から逃れたら、きつと『夢原のぞみ』は自分をさぞかし恨めしく思うだろう。

「・・・分かった」

短髪の少女は肩を竦め、嘆息を漏らした後で『この世界』に残ることを選ぶ。彼女の返事を聞いたツインテールの少女は「ありがとう」と一言礼を述べると、静かに短髪の少女の首の後ろに両腕を回し、きゅっ、と抱き締めた。

「なるべく早く帰るから。『のぞみ』^{ドリーム}のこと、お願いするわね」「オツケー、任せといて・・・」

そう返答を聞き、ツインテールの少女は親友『美墨なぎさ』^{キュアブラック}と別れたのだった。

『美墨なぎさ』と別れた後、ツインテールの少女は指定の場所へと到着する。すでにひとりの少女が待機しており、彼女は声をかけた。

「来てたの・・・」

「遅かったわね」

「ちよつと親友とお別れをしてて・・・ね」

背中には翼なのだろうか、アルファベットの「？」状に生えている青と白を基調とした衣装の少女「天上刹那が指摘すると、少女は再度苦笑いをした。

「・・・それで、用件は？」

が、それもすぐに引き締まった表情に変わり、緊急召集の件について尋ねる。すると、刹那は無表情のまま一言だけ伝える。

ハンディング
「狩り」

ターゲット
「?・・・標的は?」

刹那は再び一言で返した。

「『幸福』」

「『幸福』・・・?」

理解できずにいると、刹那は無言でファイルを手渡した。表面にずらつと標的のデータが綴られている。ツインテールの少女はそれを取り、何も言わずに速読していく。次第に少女の表情に狼狽が見え隠れし、全ての文字を読み終えた頃には口の開閉を何回か繰り返したが、出てくるのは「あ・・・」とか「う・・・」ぐらいの言葉にならない声が続くばかりだった。

「こんな・・・本当にこんな怪物が存在するということの?」

「『ヴェーダ』が計測し、すぐに私たちのほうで調べた。間違いはないはず」

「その怪物が今、別の世界に確実に存在している・・・と?」

「そう。しかも厄介なことに問題はさらに深刻化しようとしているかもしれない」

「?・・・どういうこと?」

刹那の言葉にツインテールの少女が疑問を口にすると、無表情だった彼女は一瞬間にしわを寄せ、ばつの悪い表情をしたが、すぐにその重い口を開いた。

「・・・ついさつき私たちの他に『幸福』に近づく存在が確認された」

.....数時間前。

一軒の邸宅に四人の少女が門扉の形状をした物体の前に集結していた。

「サバーニヤ、これ頼まれていたデータ・・・」

「ありがとう、バインド」

バインドと名を呼ばれたルビーのように紅い瞳の少女からデータを受け取り、サバーニヤと名を呼んだ左目に眼帯を掛けた少女は黙読と同時に脳裏に数多の情報を詰め合わせ^{インプット}をしていく。幾多の情報をわずか数分で記憶したサバーニヤは即座にデータをゴミ箱へ放り投げた。

「『永遠の楽園』・・・か」

「何？それ」

ふいに口から漏れた言葉に反応して美少年の容姿をした少女が尋ねる。彼女の問いに、サバーニヤは視線を合わせることなく返す。

「『獲物』が住処としている所よ。今から私たちはそこへ向かい、

『獲物』の帰還を待機する。詳細はおいおい解説^{はな}すわ」

「へえ・・・でもさ、何もそんな回りくどいことしなくても、『獲物』が今滞在している位置を確定すればいいじゃない・・・」

「アンタ馬鹿あ!?!」

しかし、彼女の台詞は突如眼帯している以外はサバーニヤと瓜二つの少女による呆れ声により中断される。「えっ?」となる彼女に少女は眉を^{ひそ}顰めたまま人差し指を指して肉薄する。

「デスクパイア、アンタもう忘れたの? 『レポートゲート』は一つしか世界を渡れない中傷的な欠点があるってことに。もし現時点『獲物』がいる位置に飛んだとしても『獲物』が次元を超えて逃げたら、あたしたちはそう易々と追いかけることはできないでしょうがそれよりも住処としている場所に先に飛んで確実に『獲物』を捕獲できる罠を仕掛けたほうが賢明ってもんでしょ?」

「あ、なるほど・・・でもグライファア、どうやって『獲物』を捕獲するのさ?」

「それは・・・」

「グライファア、あたしが答える」

すると、サバーニヤは懐から拡音機に似た形状の拳銃と三、四の銃弾^{ブリッド}を三人に見せた。三人の視線が自身に注視されているのを確認

して、サバーニヤは説明を始める。

「拳銃は『ノイザスピーカー』、凶音波発信式拳銃よ。そして銃弾は『マインド・カードリッジ』、標的を捕捉して引き金を引けば特殊音波が放たれて相手を洗脳するよう改造してある。この二つで『獲物』を完全に捕獲できるはず・・・」

「『はず』？テストしてないのか？」

「何しろ『獲物』が『獲物』だからね・・・でも」
ジャキ。

サバーニヤは拳銃に銃弾を装填し、音を鳴らした。

「一発で決める。『この世界』のためにも・・・」

「・・・」

その台詞に込められた彼女の覚悟と決意に三人の少女はもう何も言わなかった。

そんなこと、自分たちだって百も承知だったから。

卑劣な陰謀に嵌められたあの日から、少女たちの世界は大きく変わり始めた。

行き場を失い、地獄と化した『この世界』。

自分たちを蔑み、簡単に存在を弾き出してくれた『この世界』。

今は『監視者』の名のもとで文字通り、監視をしているにすぎないけれど。

いつか必ず、『この世界』に思い知らせる。

創造の前には、破壊が必要ということ。

「さて、そろそろ行きますか」

『テレポートゲート』が扉を開く。

『獲物』を求め、四人の少女は未知の領域に足を踏み入れた。

『幸福』に接近する者の存在についてツインテールの少女が何者なのかを尋ねたが、刹那は力なく首を振り、分からないと伝える。

「ただ・・・」

「ただ？」

「唯が言うにはわずかだけど闇の気配を感じたみたい。少なくとも同業者じゃないのは確か。もし『幸福』が邪悪なる者の手に渡り、しかも最悪『この世界』に現れたとしたら・・・」

「『この世界』は滅びの危機を迎える・・・わね」

そこから先の言葉をツインテールの少女が継ぐと、刹那はうなずく。

「だから、そいつらよりも早く私たちがその怪物を仕留めなければならぬ・・・そういうことね。話は分かったわ。で、その怪物は今どこの世界に？」

刹那はその質問にすぐに答えた。

「『救世主と墮天使の世界』・・・」

その世界の名に少女は少しだけ首をかしげる。

「・・・あまり聞いたことがない世界ね。そこには『彼女たち』は存在しているの？」

「現時点『その世界』の日本では23人の存在が確認されている。

ちなみに『その世界』にも『美墨なぎさ』キユアブラックや『夢原のぞみ』キユアドリームの存在

が確認されている。無論『この世界』とは全くの別人だけど」

「・・・ということは、『花咲つぼみ』キユアフロックスと『明堂院いつき』キユアサンシャインも？」

「・・・存在している」

「・・・」

別の世界とはいえ同じ顔と声を持つ親友が存在していることに少しだけ歓喜を覚え、会ってみたいとほんの欲が芽生えたツインテールの少女だったが、『花咲つぼみ』と『明堂院いつき』のふたりも存在していることも知り、すぐに憂鬱に変わる。

彼女からしてみればその理由は至極当然なのだが、その説明は後々後述する。

「あとアメリカ・ニューヨークに一人・・・いや、二人というべきか」

「?・・・どういこと？」

「百聞は一見に如かず。これが彼女・・・いや、彼女たちのデータ」
再度刹那がデータを手渡す。即行で黙読し終えたツインテールの少女は得心がいった表情でデータをファイルに戻すと目を閉じ、しばらく黙考に耽った。

「『幸福』狩りには日本にいる『彼女たち』の協力が必要となるかもしれないけど、そのふたりは・・・どうする？」

黙考を続けていた少女はやがて^{まぶた}瞼を開けて瞳を刹那に向ける。

「・・・正直言つて危険があるわ。光と闇の両方の力の持つのなら、なおさら・・・」

「でも神様は意地悪がお好き、みたい・・・」

ふいに背後からの声にツインテールの少女は急いで振り返る。さ
らり、と金の長髪を優雅に風になびかせた少女。天宮唯がふたりに
接近を試みていた。彼女の登場に少女が口を開くよりも早く、唯は
言葉を続けて伝える。

「『ヴェーダ』が『幸福』の現時点での位置を特定したわ。『幸福』
は今ニューヨークよ」

「！！・・・」

「ニューヨークに限らずだけど、大都市は人口が集まり、その分欲
に飢えている人が数多く存在する・・・『幸福』にとってはまさに
持つてこいの場所なのよ。どうする？」

ちっ。

軽く舌を打つ音が聞こえ、刹那と唯は少女を注視する。少女が苛
立ちを抑えているのは火を見るよりも明らかだった。

どうしてこう厄介事は悪い方向へ転がっていくのか。こちらら、
早く任務を終わらせたいのに。

せめてこれ以上厄介事が悪くならないのを祈るばかりだが、そう
もいかないだろうと少女はあきらめにも似た吐息を吐く。

「・・・私がニューヨークに飛ぶ」

結論として、少女はニューヨークには一人で行くことを選択した。
やむをえない。こうなったら、厄介事がさらなる花を咲かせる前

に自身の手で早急に芽を潰すのみだ。任務は迅速且つ早急に遂行しなければならぬ。それが『この世界』を滅ぼすかもしれないのなら、なおさらだ。

ただし、万が一の場合というのものもある。厄介事は増やしたくないが、如何なるケースも想定しておかなければ、遂行すら不可能に入る。

だから、少女はふたりに伝えた。

「私が想定したケースに入った場合、刹那と唯は、日本の『彼女たち』に接触を試みて」

「・・・分かった」

「それじゃあ、ミラクルライトの準備を・・・」

ふたりの返答を聞き、少女は小さなスティック状のペンライトを手に取り、スイッチをONにする。ミラクルライトに閃光が炸裂し、瞬時に三人の身体を包み込んだ。

「『救世主と墮天使の世界』へ！」

ツインテールの少女「水澤睦月の声に応えて閃光は弾け、一瞬で少女たちをその場から掻き消す。

幾多の次元を渡り、少女たちを包んだ光は着々と目的地へ接近していく。

世界から滅亡を回避するため。

『天上人』の名を賭けて。

プロローグ（後書き）

きつと「DX2THE LAST」よりも長い、最長プロローグに
なつたと思います。

次回『救世主と墮天使の世界』に突入します。

前兆

アメリカ・ニューヨーク。
マンハッタン島に浮かぶ巨大都市では今日も数多の人々が行き交っている。

商談成立のために歩行を急ぐビジネスマン。
手を繋いで仲良く笑いながら歩く家族。
娯楽を求めて仲間と楽しそうに出歩いている若者。

いつもと変わらない時間が今日も始まっている。
本当、つい数ヶ月前まで滅亡の危機に追いやられていたなんて、信じられないな。

すで見慣れた光景に、雨牙真夜はランチのホットドッグを頬張りながら外灯に背中を預け、そう感じていた。

かつて彼女が暮らすこの世界は二度も滅亡の危機に瀕し、しかも一度は寸前に迫られていた。

その首謀者は、他ならぬ自分。

キュアリベリオンという名を持つ自身の心の闇が生んだ邪悪の生命体だった。

一度は強大な光を滅びの力に変えて。二度目は別世界にて封印された魔王を蘇らせて。

怒り、憎しみ、悲しみなどの怨念を糧にするキュアリベリオンの魔の手は全世界にまで及ぼうとし、ことごとく破壊、蹂躪した。

そんな悪魔を全力で制止したのは、もうひとりの自分。

深い絶望の闇の中から煌く希望を手にして世界に降臨した光の戦士・キュアセイバー。

『プリキュア』という400年も古くから伝わる伝説の戦士に変身した真夜は他に数多く存在していた仲間たちとともに闇との戦いに臨み、キュアリベリオンの野望を打ち砕いたのである。二度も世界の破壊をプリキュア、そして光となった自分に阻止されたりベリ

オンは怨念の呪縛から解放されると同時に世界の脅威から永遠に消え去った。しかし、彼女は完全に消滅したわけではない。最後の最後で和解し、同じ自分である真夜の中に帰ったのだ。今も彼女は兩牙真夜の中で眠っている。

それはかつて自分が犯した罪を受け入れるため。そして精一杯生きて償いをしていくため。

過去の自分との決着を着けたが、それは同時に新たな戦いの始まりを告げていた。

「……ロモモ」

ふいに真夜は首に掛けているペンダントに手をやり、パートナーの名を呼ぶ。けれど現在ペンダントに変身しているロモモはお昼寝の真つ最中のように、かすかにだが寝息が聞こえる。ついロモモの寝顔を想像し、真夜は微笑を浮かべた。

思えばロモモにも色々と大変な思いをさせた。戦いの最中で自分がへこたれても彼はいつも自分を励まし、力になってくれた。父も母ももういない今の自分にとって、彼は離れたくないと思うほどよりかけがえのない存在になっている。今はそつとしておこう。と、真夜はペンダントを戻した。

さて、自由時間ももうすぐ終わり。そろそろ午後の講義に戻るとするか。

真夜は外灯から背を離し、食べ終えたホットドッグの包み紙を近くのボックスの穴に入れると、亡き両親が勤めていた国際医療本部に足を向けた。

陽の光がほとんど射すこともない薄暗い外路。

その一端に三人の青年がそれぞれ紙幣を一枚ずつ数えている。紙幣は自分たちのものではない。そんじょそこらにいる年下のひ弱な少年を脅して財布から奪ったものだ。いわゆるカツアゲである。もつとも収獲はいまいちだったらしく、全枚数え終えた青年たちは舌

打ちした。

「ち、シケてんな。これじゃ、遊ぶカネにもなりやしねえ」

「ほれみる。だからもちつとカネありそうなのを狙えて」

「そんなヤツ、そうそういるかよ。この不景気なのに・・・」

「あゝあ、カネ欲し」

ちりん・・・。

鈴の音が聞こえ、三人はその方角を見やる。

少女がひとり、こちらへと歩いてきていた。

年齢は11、12歳程度。栗色の長髪に黒のリボンが結ばれ、瞳は青く、小さな鈴の耳飾りを付け、裾や袖口からフリルが見えてスカートにもレースが施された上質な白地のワンピースを着ている。

が、それよりも驚いたのは少女の肌だった。顔といい、露出している

細い腕や肩といい、太股といい、どれもが着ている衣装よりも本

当に透き通るほど白く、薄暗い外路ではそれがほのかに光明を放つ

ているかにさえ思え、美しかった。いや、『美しい』など少女に相

応しくない。彼女に当てはまる文字はきつと『奇麗』が的確だ。濁

りすら見えない壮大な自然や光景を前にした時、人はあまりの『奇

麗さ』につい我を忘れる。少女は細かな外傷すらない穢れのない身

体をしており、青年たちは事実少女に見惚れ、文字通り『開いた口

が塞がらない』状態であった。

「おにいさんたち、何をしているの？」

「・・・！・・・！！・・・！！・・・！！」

にこ、とすました微笑を浮かべながら近づき、鈴を転がしたような声に青年たちはようやく我に返った。

「え・・・あ・・・か、カネを数えてたんだよ」

「お金？」

少女はちよつと首を斜めにした。

「あ・・・そ、そうだよ。もうあつち行って・・・」

青年は最後に『ろ』を言わなかった。言い終えるよりも早く、首をもとに戻した少女がこう問うたからだ。

「お金が欲しいの？お金がたくさんあったら、おにいさんたちは幸せ？」

「……え……っ……？」

『金があれば幸せか？』と質問に青年たちは一瞬声に詰まるも、すぐに返す。

「当たり前だろ。死ぬほどカネがありゃ、もう俺たちサイコーに幸せだぜ」

すると、少女は再び微笑し、

「分かった。だったら、お金をあげる」

と、言った。

「は、はぁ？おまえ、何言って……」

ばら。

青年の前に何か降った。すぐに目を下に移す。ジョージ・ワシントンの肖像画が描かれたドル札が視界に入った。

「え……？」

と声が出たのも束の間。

ばら。ばら。ばら。

青年たちの頭上からワシントンだけでなく、エイブラハム・リンカーン、ベンジャミン・フランクリンなどの肖像が描かれた大量の紙幣が次々に降ってくる。まさにドル札の雨。次から次へと降り続け、周辺を海にしていく無数のカネ。

「う……うわあ、カネ……カネだあっ！」

「やったぜ！俺たち金持ちだあっ！」

「うおおっ、よっしゃあッ！これだけありゃ、一生遊んで暮らしていけるぞあっ……！」

当初呆然としていた青年たちが次第に歓喜に震え、即時に目の色を変えて紙幣をポケットの中に入りっただけに入れるなりと、醜く漁り始めた……。

「よかったね、おにいさんたち。幸せになれて・・・」

そこには何も無いはずなのに嬉々としながら次々と両手で？んではポケットなどに入れていく意味不明の行為を繰り返す彼らに少女は心から満足げに微笑んだ。

これでいい。また私は誰かを『幸せ』にできたんだ。

これでおにいさんたちは願いどおり、死ぬほどお金に困らない。最後まで『幸せ』でいられるんだから。

さ、早く次の人を『幸せ』にしよう。

この国には、たくさんの人が『幸せ』になりたいと願っているのだから。

ちりん・・・。

『幸せ』の音色を鳴らして長髪を優雅になびかせて、少女「『幸福』は外路から立ち去った。」

次回予告

突如強大な力を感知し、急ぎ現場に駆けつける真夜

そこで見た光景に彼女は愕然する

次回、『異変』

そこは天国か、あるいは地獄か・・・

前兆（後書き）

刹那氏との共同作なので『プリキュアVSプリキュア』風に次回予告を行うことにしました。
以降も続けていきます。

異変

約90分の講義ようやく終わり、真夜は外に出る。広い庭園の中間程辺りでうーんと、伸びをした。

「んううあああああゝっ、肩凝ったあ！」

年寄りじみた台詞を吐き、首を左右に振って両肩をポキポキ鳴らす。

しかし、これで今日の授業はおしまいだ。帰ったら、ひさしぶりに大浴場で疲れを取るとするか。

その後の予定を決め、真夜は自分と似たような境遇に遭った子供たちの生活を保護している施設に足を向ける。が、結局真夜は浴場で身体を休めることは許されなかった。

ぽんっ！

首に掛けていたペンダントが煙を発し、驚いた真夜はその場で停止する。煙はすぐに晴れ、背中から羽が生えた白い子犬似の妖精、パイトナーロモモが姿を見せる。

「ロモモ！」

「真夜ちゃん、近くでもの凄い力を感じたロモモ！すぐ行ったほうがいいロモモ！」

出てくるやいなや、ロモモは凄い剣幕で訴える。

「もの凄い力？それって悪いものなの？」

ロモモに限らず、プリキュアのそばにいる全ての妖精に共通することだが、彼らがこういう台詞を叫んだ場合は敵の襲来を告げる前兆だ。闇の者の纏う強大な邪気を感じてしまうのか、直前にみな急いでプリキュアたちに告げる。そして案の定闇の手先が現れて開戦の火蓋が嫌でも切られるのだ。しかし、真夜の質問にロモモはなぜか難しそうな表情を作り、腕組みした。

「いや・・・違うロモモ。どちらかというところ『いいもの』のような気がするロモモ」

「『いいもの』・・・？闇の手先じゃないの？」

「うん、闇というよりもむしろ・・・とにかく行って見たほうがいい口モ！悪いものじゃないけど、強すぎるんだ口モ！」

「わ、分かった。分かったから・・・」

再び剣幕で肉薄してきた口モモをなだめ、渋々了承する。

全く、疲れているというのに面倒くさいなあ。

しかし、ほうっておいてさらに面倒が増えたら、余計困る。厄介事は大きくならないうちになくしてしまうのが得策だ。口モモの言う『いいもの』の意味がまだよく理解できないが、少なくとも闇の者でないのなら人に害を与えはしないだろう。

とりあえず、見に行くだけ行って、ちゃちゃっとなるべく早く済ませてくるとするか。

口モモの案内を受け、真夜は走り出した。

先頭に行く口モモを追い、真夜は路面電車の線路の大通りを抜ける。

「こつち口モ！」

「口モモ、待って！」

小さな不動産の建物の角を曲がり、見えなくなったパートナーを急いで追いかける。すぐに宙で停止していた口モモを見つけ、文句を飛ばす。

「もお口モモ、早すぎるよ。こつちは疲れてるんだから少しくらいスピード・・・」

彼女は文句を最後まで言えなかった。眼前に広がる光景に口モモ同様愕然となっていたから。

大勢の人たちが、いた。数はおよそ30人。無論通りに人々が大勢いたって、別段それは珍しくもなるともない日常の光景だ。ではなぜ真夜も口モモも驚いたまま動きが固まっていたのかというと、こたえ解答は簡単、人々が明らかに『普通』ではない状態だったからであ

る。

人々の表情は『幸せ』に満ちていた。誰もが何の邪念もない笑顔や嬉々とした表情を浮かべている。

「ねえパパ、ママ。今度は家族三人でピクニック行こうよ。私とってもいい所知ってるよ」

「栄転だ！フランス支社の支店長だ！やるぞ！俺はやるぞおっ！！」
「あなたあ、もうすぐ二人目が生まれるのよ！今度は女の子が欲しいわあ！」

と、幾人かがそういった言葉も喋っている。しかし、その幾人も八十近くの老婆だったり、ダンボール暮らししているホームレスだったり、到底胎児ができそうにない身体を持っていたりしている。にも関わらず、みながみな『幸せ』になっている。目が開いているのに、とてつもなく楽しい夢を見ているかのようなだった。

何なの・・・ 一体これはどうしたっていうの？

第三者から見ればあまりにも異常な光景に真夜は何が何だかさっぱり分からなかった。

ふと、視線を感じる。幸福な夢を見ている人々のちょうど中央、そこに少女が微笑んでいた。

栗色の長髪、白地のワンピースに透き通りそうな白い肌。もしここが教会だったら、天使と間違えてしまいかもしれない。それだけ少女は愛らしく、奇麗だった。

「真夜ちゃん、あいつ口モ！あいつから強すぎる力を感じる口モ！」
え・・・？

少女を指差したパートナーの声に真夜は無意識から意識を奪還する。一瞬でも我を忘れていたことに真夜は二度三度瞬きをした。

まさか私、あの娘に見惚れていた・・・？

再度少女を見る。にこ、と少女は微笑していた。そのあどけない微笑、悪意の欠片すらない結晶に真夜は、ひやり、と心臓を素手で撫でられたような感覚を覚え、なぜだか分からないがゾツとした。

何・・・この娘は何なの？

気がついたら、真夜は後ろに下がっていた。「真夜ちゃん？」と、ロモモが不思議そうに振り向く。数歩とはいえ、どうして後退してしまったのか、自分でも分からなかった。

ただ、これだけは分かる。あの少女は危険な存在だ。

このままだと、周囲にいる人々と同じように自分もおかしくなってしまう。

人々を夢から醒ますためにもと、真夜はこの瞬間目の前にいる少女を排除すべき『敵』と判断した。

「っ、ロモモ！」

「分かつてるロモ！」

ぼん、と煙を発し、ペンダントに変身するパートナー。真夜はそれを素早く取っては人差し指で弾き、唱える。

「プリキュア！セイント・リバーズ！」

白銀が炸裂し、真夜の全身を覆い尽くす。光のガーデンで踊りながらスキップをする彼女の身体に大量の羽毛が集まり、純白の衣装へと変わっていく。二の腕までの袖に天女のような肩飾り。開花の形に裾が広がるスカート。胸部に白の薔薇があしらわれたリボンが施された後で黒い長髪が銀に染まり、水色のカチューシャが装着される。さらにその上に短く薄い透明のベールが被せられると、背中から透き通った鋭角な六枚の長い翅はねが生えた。

最後にペンダントを首に掛け、ふわり、と地上に舞い降りる。

「全てを希望へ導く救世の光！キュアセイバー……！」

名乗った刹那、神々しい光が彼女の背後で煌き、弾けた。

ニユーヨーク

この国ではサムライバーガーと名になっているテリヤキマックバーガーにするか、それともビッグマックにするかをひとしきり悩んだ後で後者を選び、ついでにコーヒーも注文した水澤睦月は商品の入った紙袋をカウンターから受け取ると、マクドナルドを出た。

どこか昼食に適した場所はあるかと探していると、近くに小さな

公園を見つけ、そのベンチに腰掛ける。公園は睦月の他に人はなく、せいぜい鳩が数羽歩行している程度だったが、気にせずに睦月は紙袋からビッグマックを取り出して包み紙を開くと、ぱくつと頬張った。さすがはアメリカ。肉も厚いし、サイズがモノをいう。次にコーヒーの入った紙コップを手に取り、口に運ぶ。だがこちらは口に合わなかったらしく、睦月は瞬時に顔をしかめ、紙コップをすぐに置いた。

仕方なく再度ビッグマックを口につけようとして、空気の流れが大きく変わったのを感じし、睦月は上空を見上げる。間違いない。今回の標的ターゲットが動き出した。このままだと光と光の衝突衝突が起きてしまう。

「いけない！」

睦月はすぐに立ち上がり、近くのボックスにビッグマックとコーヒーを投げ捨てて現場に急行する。

標的の力は強すぎる。何しろ、存在だけで世界を滅ぼすことさえ可能とするのだから。

力の強さをもしこの国に存在しているプリキュアが察知して接触したら、さらに事態は深刻になる。いや、もうなっているかもしれない。

回避しなければ、と睦月は走りながら片腕に嵌めている腕時計を眼前にさらし、変身コードを唱える。

「プリキュア・リジエナイト・ユニゾン！」

次回予告

人々を幻惑から醒ますため、謎の少女に戦いを挑むキュアセイバーところが少女はまだ癒えていない彼女の心の闇に突ける

次回『夢の中の再会』

悲劇と苦痛に満ちた現実の中で生きる必要は、ない

異変（後書き）

気づいた方もいるかもしれませんが、ラストの睦月の行為は『プリキュアvsプリキュア』の『04 孤高の天上人』の回のオマージュです。

夢の中の再会

純白の戦士・キュアセイバーに変身を遂げた真夜は即座に専用武器・リライフシンバルを両手に召喚、前方に佇む少女を見据えるも、そこから少しも動こうとしなかった。

隙がない。いや、本当は隙だらけなのだが、あまりにも無防備でかえってそれが疑心暗鬼にさせる。また目の前にいるのが今まで戦ってきた闇からの異形者ではなく、どこにでもいそうな少女の外見をしているというのも真夜を躊躇わせている要因のひとつなのだろう。それに少女は人々をおかしくさせてはいるが、誰も傷つけてはいない。

だからといって、プリキュアとしてこの状況をほうっておくわけにもいかない。セイバーは色々と思案した末、『セイバー・サウンドウェイブ』でしか状況を打破する他ないと結論づける。『セイバー・サウンドウェイブ』。リライフシンバルを強く叩くことで強力な音波を発生させる技。音波を直に浴びると、邪悪なる者は即座に鼓膜が悲鳴をあげ、ひどい時には吐き気を感じるほどの頭痛に喘ぐことになる。強力だが、特に外傷を負うことはない。『幸せ』に浸っている人々には少し嫌な思いをさせるが、今は少女を排他しなければならぬ。これ以上、事態が重くならないためにも。

そう決定を下し、セイバーはシンバルを持った両腕を大きく開いて『セイバー・サウンドウェイブ』を撃つ準備を始めようとして……少女が視界からいなくなっているのに気づいた。

「……どこに……っ!？」
開いた両腕を降ろし、急いで左右を見る。

ちりん……と、鈴の音が背中の中からはっきりと聞こえ、すぐに身体ごと振り返る。

途端に青い瞳と目が合った。

「ひ……っ……」

この娘、いつの間にも・・・いや、どうやって一瞬で私の後ろへ・・・！？

小さな悲鳴をあげた瞬間、セイバーは全身から力が抜けていくのを感じた。すとな、と腰が抜けたように身体が崩れる。

少女はあどけない微笑を浮かべたまま、座り込んだセイバーの顔をそつと両手で触れる。少女の手は温かく、優しかった。セイバーは青い瞳を覗き込んだまま、何も言わなかった。身体全てから力が抜け、言うことを聞かない。頭の中は今にも真っ白になりそうであくらくらした。微笑している少女のかわいい唇が動いた。

「・・・おねえさん、幸せになりたい？幸せになっていいのよ。私がおねえさんを幸せにしてあげる」

その声が聞こえなくなると、視界がふいに弾け、何も見えなくなつた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一瞬、何が起きたのか分からなかった。恐る恐ると両目を見開く。視界は別の光景に変わっていた。

「えっ・・・・・・・・？」

菜の花畑の中に、自分は立っていた。周囲を見渡しても黄色い春の花が広がっている。頭上は爽やかで、雲ひとつない澄み切った青空が見えていた。

「ど・・・どうなっているの？」

気がつけば、変身が解かれていた。純白の衣装ではなく、いつもの私服姿にさらに戸惑う。

「そつだ、ロモモは・・・？」

と、真夜は人前では普段首に掛かっているはずのパートナーがいないのに気づき、急いで探そうとした。

「真夜」

その声に、背後から呼びかけられ、ロモモを探していた真夜の全身が一瞬にして硬直した。

鳥肌が立ち、鼓動が早鐘を打つ。

「……………」

真夜は探すのをやめ、ゆっくりと振り返った。

「お…お父さん…お母さん…っ」

そこにはもう帰ってくるはずがなかった人が立っていた。

その顔、その姿、まぎれもなく懐かしい父と母だった。

「真夜…、会いたかった」

母の優しい声に、真夜の胸が一気に締め付けられた。

「ど…どうして？お父さんとお母さんは…」

「マヤ」

またも懐かしい声に呼ばれ、真夜は振り返る。

サッカーボールを片手に持った12歳くらいの少年が笑って立っていた。

「テッド…」

両親とともに真夜が支援活動を行っていたアフラート共和国ゴザドック村で友達になった少年、テッドが最後に見た姿そのままだった。けれど両親だけでなく、彼まで現れたことに、真夜は余計混乱を覚えた。

父母もテッドも、一年前に突如地球に飛来した邪悪の化身の手にかかり、真夜の目の前で無残に消されたはずだ。どんなに祈っても帰ってくるはずがないと思っていた。

その人が、今、目の前で確かに存在している。

自分の頭がどうかなのではないかと、混乱せざるをえなかった。

「い…一体どうなってるの？お父さんもお母さんもテッドもみんな死んだんじゃない」

「なに言ってるんだよ、マヤ。そりゃいくらなんでもひでーよ」

ぴよん、と跳んでテッドが真夜の腕に抱きつく。夢ではない確かな感触に、真夜は混乱を一層激しくするが、父親母親が目の前まで来て、混乱は即停止する。腰を少しだけ曲げて、母は愛しい娘の顔をそっとなで触った。

「ごめんね、真夜。ずっとひとりにさせて」

「今まで本当によく頑張ったな」

「……」

ああ……この声、この手、間違いない。本物のお母さんとお父さんだ。

瞳の奥から込み上がってくるものを堪えきれず、ぽた、ぽた、とこぼれていく。

一瞬にして、記憶も気持ちも幸せだった頃に戻っていく。

国際医療スタッフとして、世界各地で人災や自然災害に苦しむ人々を懸命に助け回る両親を真夜は心から尊敬していた。いつかは両親と同じように人々を助けていく仕事をしたいと夢を見て、一生懸命勉強もした。そしてゴザドック村でいつしかサッカー選手になりたいと夢に向かっていたテッドや子供たちと友達になり、未来への希望が灯ったその笑顔がもっともつと広がっていきますよう願っていた。

けれど、その夢も願いも一瞬で絶望に碎かれ、大切な人たちの死を真夜は心から嘆き、悲しみ、怒り、狂い、世界を憎んだ。悪いことだと分かっているにも、このような理不尽な世の中を破壊せずにはいられなかった。けれど……。

「もうずっと一緒よ、真夜」

「ずっと……」

「ああ。もうおまえをひとりにしない。私たちはずっと一緒だ」

「ママ、俺もずっとそばにいるよ」

「テッド……うん……うんっ！」

愛する人たちの誓いの言葉に、真夜は泣きながらも満開の笑顔を咲かせていた。

「真夜ちゃん！真夜ちゃん！一体どうした口モ！？」

口モモは一生懸命叫び、真夜の頬をびしゃびしゃ叩いた。けれど

真夜は目を覚まさない。アスファルトの地に座り込んだまま、真夜は閉じた目から涙を流しながら微笑していた。

「やい、おまえ！一体真夜ちゃんに何をした口モ！？」

夢から覚めない真夜から栗毛の少女に目を移し、口モモは怒りに怒り、ありつたけの眼力で睨んだが、少女は答えずに『幸せ』に浸っている真夜の頭を優しく撫でた。

「どの世界もすべからく悲劇に満ちている。人はただその心の痛みに苛まれ、それでも生きていくしかない・・・だけど、私ならあなたたちをその苦しみから解放することができる」

そして、少女は歩き出し、真夜と同じように幸せの夢に浸る人々の中央で足を止めた。

「あなたたちは十分に苦しんだ・・・だからもう幸せになっただけだよ。私が連れて行ってあげる。永遠の時間の中で、幸せに暮らさない・・・」

「何を・・・？」

ちりん・・・。

口モモが言い終わるよりも早く、少女は鈴の音を鳴らし、周辺を光に包んだ。あまりのまびしさに口モモは目を閉じる。光はすぐに消え、口モモは急いで目を開けた。通りには誰もいなかった。少女も。人々も。そして・・・真夜も。

「真夜・・・ちゃん？」

真夜は急ぎ、周囲を見渡して真夜の名を何度も叫ぶ。だがどんなに叫んでも、真夜は出てこなかった。

「そんな・・・まさか真夜ちゃん、あの娘に・・・っ！？」

目頭が熱くなり、唇を噛んで懸命に堪える。ぐっと我慢し、宙で大きく深呼吸して、口モモはありつたけの声で真夜の名を呼ぼうとして、

「真・・・ぐふっ！！」

口を手で塞がれた。もごもごしていると、上から声が降ってきた。「全く、あんなに私の名前を呼んで、誰かに見られたら即座に研究

所か動物園行きよ。やる前にちよつとは考えなさいよ、この馬鹿妖精」

「ぶはっ」

その聞き覚えのある声に、ロモモはようやく塞がれた口を解放されて上を見、

「ま、真夜！・・・ちゃん？」

歓声をあげようとして、妙な違和感に気づく。

ロモモの口を塞いでいたのは、雨牙真夜だった。だがロモモの知る真夜とはどこか違っていている。まず第一にこの真夜は漆黒の制服を着、右目に黒の眼帯を掛けている。言葉違いもいつもの真夜と違う。極め付けが彼女の全身を纏う邪悪さ。身体が戦慄し、小刻みに震えてしまうこの恐怖を、ロモモは知っている。まさかと最悪の予想をしてみ、ロモモは神妙に尋ねた。

「おまえ・・・誰ロモ？」

すると隻眼の少女は、ふん、と鼻を鳴らした。

「雨牙真夜アムキキヤ・・・またの名はキュアリベリオンよ」

「！！・・・」

最悪の予想が当たり、ロモモはすぐに彼女から離れた。

キュアリベリオン。

言うまでもなく、雨牙真夜のもう一つの姿にして世界を二度も破壊しようとした史上最悪最凶のプリキュア。その凶暴性と非道さを十分に知っているロモモは瞬時に真夜と同じ顔を持つ少女に対し、警戒を強めた。

「そう怖がらないで・・・とは言わないけど、安心なさい。弱い者を虐める趣味はないから」

「ロモモは弱くないロモ！」

「そう、失礼」

「おまえ・・・、なんでまた現れたんだロモ？」

ロモモの疑問ももつともだった。彼の知る限りでは隻眼の少女「キュアリベリオン」は最後の最後には改心したが、同時に怨念の呪縛

から解放されて全ての世界から永遠に消えたはずだった。そのリオンがどうして今になって、再び目の前に現れたのか？

すると、隻眼の少女は少し両肩を竦めた。

「最期の瞬間ときに言ったでしょ？私は消えるんじゃない、雨牙真夜の影の部分として戻るって。私はずっと真夜の中で眠ってたの。でも、強すぎる光に無理やり起こされて真夜から引き離されたのよ」

「強すぎる光？もしかしてそれ、あの娘このこと口モ？」

「おそろく」

「一体、あの娘こは何者なんだ口モ？」

「さあ？分かっているのはあの娘この光は強すぎて、非常に危険ということだけね。・・・そうね、そこから先は『彼女』に教えてもらおうかしら？」

「彼女・・・？」

「ええ・・・」

真夜はゆっくり背後へと首をねじり、左目を細める。

「ちょっとそこ、さっきから私たちを窺っているのはバレバレよ。隠れてないで出てきたらどう？」

ふいに建物の影から誰かが姿を現し、一歩ずつ接近を試みる。

年齢は14歳程度。紫のツインテールに、青のレオタード上に紫の軍服を着服したような衣装。手は長袖で、衣服の下には濃い青のロンググローブが見え、紫の宝石をあしらった青いリボンが装飾されている。そして両手には拳銃が二挺握られていた。

陽の下に姿を露にした少女に、真夜は左目を細めたまま静かに問う。

「・・・誰？」

「悲しみを終わらす、大地と海の守り手・・・」

少女は一旦口を噤み、すぐに開いた。

「キュアアルガティア！」

次回予告

リベリオン

真夜とロモモの前に現れた少女、キュアアルガティア

彼女と謎の少女との関係は一体何なのか、そして・・・

次回『射撃手対墮天使』

大切なもののためなら、自分はどこまでも卑怯になれる

夢の中の再会（後書き）

大都市を舞台とした激戦描写、頑張ります。

射撃手対墮天使

背中にサブマシンガンとショットガン、腰元のホルスターにデザ
ートイーグルを二挺、さらに閃光音響手榴弾、両手に二挺拳銃と、
重武装した青と紫のプリキュア、キュアアルガティアの容姿に真夜
は少しだけ眉を吊り上げる。

「キュアアルガティア・・・ふうん、射撃手のプリキュアなんて、
これは珍妙ね」

「どうして私に気づいたの？」

真夜の感想などに分かりきっていたのか、アルガティアは無
視して疑問を投げつける。無視されたのに軽くカチンと来たらしく、
真夜は一瞬表情をしかめたものの、素直に問いの返答を返す。

「姿は隠せても気配を隠せないようじゃ、意味ないわ。特に私みた
いな闇にとつて光はつい敏感になるからね」

「・・・なるほど。どうも勉強になったわ、雨牙真夜」

「!・・・どうして私の名前を？」

すると、アルガティアは隻眼の真夜を見据えたまま、続けた。

「あなたたちのことはすでに調査済みよ」

「?・・・どういう意味かしら？」

「知る必要はない」

年下のくせに人を冷ややかに見るような態度に、ほのかに憤りを
感じる。

「・・・じゃあ質問を変えるわ。射撃手さんは何しにここに来たのか
しら?あの娘と何か関係あるわけ？」

「真夜ちゃんはどこ行った口モ!？」

「雨牙真夜はおそらく『永遠の楽園』に連れて行かれたと思うわ」
自分ではなく、口モモに返事をしたことに真夜はより一層苛つい
た。

「『永遠の楽園』・・・?」

「標的が住処としていた場所よ。彼女はきつとそこにいると思う。
もちろん、彼女とともに消えた人たちも。」

「そこはどこにあるロモ？」

「・・・次元と次元の間に存在してるわ」

つまり、別世界ということか・・・と、ロモと会話させたほうがいいと結論に至った真夜は顎に手をやりながら黙考する。

「そこに行けば、真夜ちゃんと会えるロモ？」

「たぶん・・・ね」

「行くロモ！いや、連れてってくださいロモ！真夜ちゃんに会えるのなら、ロモはたとえ火の中水の中にも突っ込むロモ！」

そう宣言をするが、アルガティアは少し困ったように微笑すると、駄々をこねる子供をなだめるように声をかけた。

「悪いけれど、そうもいかない。『永遠の楽園』は名前に『楽園』と入っているけど、夢のような世界ではない。いうなれば、アマゾンのジャングルみたいで獰猛な動物たちも暮らしているむしる危険な所・・・そんな場所にあなただを連れて行くわけには・・・」

「じゃあ私は？」

真夜が再び声をかける。ようやく反応し、顔を向けたアルガティアに彼女は交渉を試みる。

「真夜と私は一心同体よ。真夜がそこに本当にいるなら私も・・・」

「嫌よ」

ところが即答で却下される。しかも『ダメ』ではなく、『嫌』の一言で片付けられたことに真夜は引つかかりを感じた。

「嫌・・・？」

「ええ、嫌よ。私はあなたと一緒に行くのは願ひ下げ」

「・・・理由を聞いていいかしら？」

「さつき言ったわよね？『あなたたちのことはすでに調査済み』って。雨牙真夜、あなたが過去に二回も世界を破滅に追いやろうとしたことも判明済みよ」

「・・・だから？」

「そんな悪魔を信用して、はい分かりましたって私が言つと思つ？」
それに似てるのよ、あなたは。

自己中心的に世界を人を見下して非道な行為を行い、弱いのに卑劣さだけは一人前の卑怯者^{あひて}たちに。

「……それで？要するにあなたは私が嫌いだから、一緒に行きたくないというわけ？」

その問いに、アルガティアは皮肉たつぷりに言い返した。

「卑怯な行為を繰り返し、ろくに戦えない哀れな人なんて、足手纏いもいところというわけよ」

ぶちつ。

アルガティアの耳に何かが切れる音がした。いや、聞こえたような気がした。

何の音……？

そう反応すると、突如隻眼の真夜が宙に躍り出た。よく見ると、両手にいつの間にか三日月形の刃を煌かせた巨大な鎌が握られていく。アルガティアが注視していると、彼女は急降下を始めるとともに死神の鎌を一気に振り下ろした。

アルガティアはすぐ横に跳び、鎌は彼女がいた位置に思いつきり突き刺さり、アスファルトが深く抉られる。標的^{リク}を仕留め損ねた真夜^{リオン}の周囲に無数の黒蝶が集まる。そのうちの一匹が手に留まり、漆黒に輝く口紅に変わった。蓋^{キャップ}を取り、唱える。

「プリキュア・ダークネス・エヴォリューション！」

口紅から一筋の光明さえも射すのを許さない暗黒の闇が溢れ、彼女の全身を覆い尽くす。闇の中で身体をうねらせた彼女に黒蝶が無数に集まり、衣装へ変えていく。襟の立った二の腕までの袖の漆黒の衣装。首筋にぞんざいに掛けられた、締まっていないネクタイ。腹部に描かれた蛇眼の紋様。その下に施された黒と白のチエツクのスカート。両足にブーツが履かれ、右腕に鋼鉄製の三本の鉤爪が装備されると、彼女は最後に髪を掻きあげ、二つの黒のリボンで結ばれたツインテールに変えた。大鎌『^{ウエイブ・ハンター}希望狩』を両手で器用に振り回

し、幾多の邪悪マイナスを纏まとって地上に降臨すると、

「全てを無むへ誘こよめう漆黒の墮天使、キュアリベリオン！」

背後から大量の黒蝶を飛ばし、絶大な闇の邪気オーラを周囲に蔓延まはさせた。

突如奇襲を仕掛け、さらに闇の戦士に変貌を遂げたキュアリベリオンに、アルガティアは強い邪気を肌で感じながらも微塵の恐怖もない強い瞳で捉える。

「……いきなり何のつもり？」

「年上には敬語使えって、学校で習わなかった？」

「相手による」

「……本当、いちいちム力つくわね。まあいいわ。ム力つくやつほど鬨なびり甲斐があるからね。あなたに格の違いというものを教えて、嫌でも一緒に行くのをイエスと言ってもらおうから……っ！」

「……これだから、野蛮人は。だけど、格の違いって言葉、そっくりそのままお返しする！」

言うなり、いきなり二挺拳銃を撃鉄音と同時にぶっ放す。が、瞬時に視界から消え、困惑する。

瞬間移動か……っ。

リベリオンが取る奇襲戦法の一つ。どこに現れるかも分からず、相手を幻惑させる最も効果的な手段だ。だが奇襲戦法というものは、大抵相手の目が届かない背後を狙うのが多い。アルガティアはリベリオンが消えて真っ先に背後に銃口を向け、二発鳴らす。不発に終わり、背後ではないのを確認する。

「ではどこに……っ!？」

「上よッ！」

急いで頭上を見上げ、再び死神の鎌が迫ってくるのを目の当たりにする。火花が散って金属音が鳴り響いた。リベリオンの大鎌とアルガティアの二挺拳銃が交差したのだ。目と鼻の先まで刃が近づき、リベリオンの剛力に押されていく。さすがに二度も世界を敵に回した実力は伊達ではない。「くっ……」と声が漏れる。だが、いつま

でも堪えているアルガティアではなかった。交わっていた二挺拳銃から離れ、素早く次の一撃を放とうと今度は下方向から鎌を飛ばそうとするが、そのわずか数秒の間がアルガティアに余裕を生んだ。アルガティアは左手に握っていた拳銃を捨て、すぐ背中のショットガン、通称ケルベロス？を取り、リベリオンの額を狙って砲身を向ける。

「・・・ッ！！」

銃口が火を噴いたが、リベリオンは屈かがんで砲弾を危うく回避した。しかし、それがアルガティアに反撃を与える隙となり、彼女は後方に跳んで一気に距離を取ると、拳銃とショットガンの二つの銃口から鉛弾フリットを続々と撃つ。リベリオンは大鎌を器用に振り回し、巨大な刃で全て叩き斬りながら急迫していく。最後の一弾を斬られ、リベリオンは眼前で鎌を大きく振りかざした。

もらった・・・っ！

振り下ろそうとして、アルガティアが一瞬で消失する。「え？」
と思った瞬間に腹部に強い衝撃を受けた。

「ぐふっ！」

撃たれたと分かった時には肩や腕、太股にぽつぽつと穴が次々に空いた。致命傷にはならなかったが、やはり撃たれたら相当痛い。それが一発二発どころか何発もとなるとなおさら。

一体、どこから狙っている・・・！！？

周囲を見渡して、ようやく赤い何かが残像が見えるほどの超高速で移動しているのに気づく。両眼に神経を集中させ、それが全身を赤く発光したキュアアルガティアと分かった刹那、胸部に衝突が起こり、身体を激しく震わせた。

さすがはトランスモード。刹那チカラの能力を借りたものだが、効果は抜群だ。二度も世界の破壊を目論んだあの悪魔が遂に倒れ込んだ。アルガティアは少しだけ心の中で鼓舞していた。データに記述され

ていた通り、キュアリベリオンは高速や俊敏に移動する相手が苦手らしく、対抗策を持っていない。力ならかつて単独で19人のプリキュアを苦戦することなく倒した経歴があるらしいが、その後彼女はレッドの種の力を浴びて光速で移動可能となった『花咲つぼみ』と『来海えりか』のふたりにいいように蹂躪され、敗れているのも判明している。このままならいける。と、肩で激しく息をしているリベリオンにまた銃口を向けようとするも、パチン、と彼女が指を鳴らした直後に邪悪な気配を察知し、踵を返す。背後で黒く液状化したアスファルトから、ぬうつ、と生えた巨大な黒い『悪魔の手』に思いつきり殴られ、全身を強打した。

「……ッ!」

傷ついた身体を起こすも次々に周囲から『悪魔の手』が生え、巨大な五指で捕らえようとする。次々と襲いかかってくるのをかわすと、今度は遠吠えが聞こえ、黒毛に覆われた凶犬が数匹、体液を吐いて跳びかかる。

「小賢しい真似をつ!」

牙を曝した口に銃口を突きつけて、一匹を地獄へ送る。

ふと、気づけば、リベリオンがいなくなっていた。

『悪魔の手』と凶犬の二つの僕を駆使してなんとか急場を凌いだ。これも時間の問題だ。口惜しいが、彼女の銃火器の腕前は本物だ。あんな14歳の小娘が相当な修羅場を潜り抜けてきたというのか。

傷ついた箇所を抑えながら、リベリオンは三階建てアパートの脇道で呼吸を繰り返していた。撃たれた箇所は所々赤黒く血が流れて止まらない。もし自分が『普通』の人間だったら、とつくに死んでいるだろう。

ははは……二回も世界を滅ぼそうとしたこの私が、全く不甲斐ない。

力なく笑うもこれからどう反撃するか思考を練っていた。

「・・・あの」

ふいに声が聞こえ、リベリオンは横を向く。ロモモが心配そうな面持で宙に浮かんでいた。

「おまえ・・・」

「だ、大丈夫ロモ？」

「へえ、心配してくれるの？」

「い・・・一応、同じ真夜ちゃんだから」

「・・・」

「あの、これからどうするロモ？」

「・・・おまえ、真夜を助けない？」

「え？」

「真夜を助けたいって聞いているの」

「そりゃそうロモ！ロモモは真夜ちゃんのこと、大好きなんだロモ！命を賭けてでも助けたいロモ！」

「・・・だったら、ちよつと私に協力して」

「協力？」

「真夜を助けたいという気持ちは私も同じ。大切な人を救うためなら、私はどこまでも卑怯になれるし、非情になれるわ。だから、手を貸しなさい」

リベリオンは口元をおぞましく微笑させると、懐から携帯を取り出した。

「ちよつと、面白いことするわよ」

そして、ある三つの数字をプッシュした。

次回予告

リベリオンを圧倒するほどのスペックを見せるアルガティア
彼女に対し、リベリオンが仕掛けた逆転の策とは・・・

次回『選択』

さあ、撃てるものなら撃ってみる

射撃手対墮天使（後書き）

双方の戦いに一応の終止符ピリオドが打たれます。

選択

両手に抱え、ありつただけの銃弾を凶犬たちに浴びせたアルガティアは急いでサブマシンガンを投げ捨て、手首をうねらせて包囲している『悪魔の手』に手榴弾を二、三投下する。光芒と衝撃波を炸裂した手榴弾は一瞬で周辺の建造物の窓ガラスを粉碎、邪気を纏った『悪魔の手』も粉塵と化した。

しかし、アルガティアも無傷というわけにいかなかった。二度は『悪魔の手』に殴打されたし、唾液を飛ばしながら奇襲を仕掛けてくる凶犬の爪牙に何度か軽傷を負わされている。当然呼吸も激しく繰り返されていた。

「・・・来るか」

邪な気配を察知し、ホルスターからデザートイーグルを両手に持ち、いつでも撃てるようトリガーに指を掛け、臨戦態勢を取る。陽が傾き、通りを照らす光が弱まり、静寂がしばらく続く。

わずかな静寂が打ち破られ、自身に急迫する存在をアルガティアは瞬間に知った。

「！・・・そこか！」

が。

「なっ・・・!?!」

「こ、こんにちは口モ」

銃口を向けた先、エへへと困ったように笑う白の妖精に彼女は両目を大きく見開いた。そのわずかな瞬間。本当に一瞬の出来事だった。後頭部を思いつきり殴られ、ショックで膝を着く。振り返らずとも分かる。リベリオンが今度こそ背後を取ったのだ。光の戦士の時の相棒とはいえ、無関係の妖精を囮にして隙を突くとはなんたる卑劣！

「ぐっ・・・!!」

ツインテールの片髪を強く引つ張られ、思わず喘ぎ声が出る。

ふと気づくと、眼帯が外れたリベリオンの隻眼の瞼が静かに開く。
まぶた
暗く深い、紅が輝いていた。

催眠。

それが雨牙真夜から引き裂かれて幾多の怨念の集合体として蘇ったキュアリベリオンに備わった新たな能力だった。瞳のない、この血が溜まったような紅い右目を覗いた者は誰もが瞬間に意識が朦朧となり、ほんのりと瞳が赤く染まって自覚がなくなる。そしてリベリオンの命令を自分の意志とは関係なく動いてしまうまさに最強の武器といえた。

どうして自分にこんな力が新たに追加されたのかはリベリオン本人も知らない。数えきれない憎悪を背負い、世界の破壊を一人の少女に行わせるせめてもの代償としてリベリオンの中に巢食う怨念が新たに授けたのではないかと一説を立てたことがあるが、怨念の呪縛から解放された今やそれは永遠の謎だ。

もっともリベリオン自身そんなことどうだっていいと思っているし、他人を思いのままに操れるこの力を得たことを幸運にさえ思っている。その証拠にこの力のおかげで相手を傷つけずに勝利することができるのだから。

「私の言うことに従いなさい」

紅い右目をこれでもかと眼前に押しつける。アルガティアの両目が大きく開き、拳銃を持った両手がだらんと脱力した。力なく俯いたアルガティアに、リベリオンは？んでいた片髪を離す。すとな、とアルガティアは前髪に隠れて見えない視線を下に移したまま、身体が崩れた。

「・・・立って」

ニヤツと口元を歪ませて冷酷に見下ろしながらリベリオンは最初の命令をする。アルガティアは俯いたまま何も言わず、すっと立ち上がった。よし、催眠にかかった。これで彼女は自分の忠実な奴隷

だ。この小娘には知ってることを全て吐いてもらい、護衛として付き添ってもらおう。敵に回すと厄介だが味方にすればこれほど心強いものはない。

「さ、私たちをその『永遠の楽園』って所に案内しなさい」
「……………」

甘い声に従い、人形となったアルガティアはゆっくりと歩み寄り、
・・ピタ、と銃口を悪魔の胸に押し当てた。

「は……？」
「断る！」

衝撃が胸を貫通し、漆黒の衣装を纏った少女の姿をした悪魔の身体が大きく吹き飛ばされる。血飛沫が宙を舞い、悪魔は背中からアスファルトの上に叩きつけられた。

「がっ……は……っ！」

苦痛に表情が歪みながらも上体を起こそうとして、両腕の関節部分を撃ち抜かれる。再び喘ぎ声をあげたりベリオンの紅い右目に銃口が押し当てられ、動きを封じられた。まさかの事態に口モモはあわわしながらもどうにもできず、宙に留まる形となる。一気に立場が逆転されたりベリオンは変身が強制解除され、黒の制服姿に戻ると、ごほごほっと塩辛い血の味を噛み締め、苦しげに相手を見上げる。

「なぜ……私の催眠が……？」

「答えはこれよ」

アルガティアは標準を外さないまま、片手の指で両目から何かを摘む。二枚のコンタクトレンズが掌に転がっていた。

「これは『マインドシャウト』。目を通した催眠や洗脳を遮断する特殊コンタクトよ。あなたが右目の催眠を仕掛けてくる可能性はすでに想定していた。何回も言ったでしょ？『あなたたちのことはすでに調査済み』とね！」

「そついう意味も含まれてたのね……」

アルガティアはコンタクトを両目に戻し、上から目線で悪魔を見

下ろす。

「残念だがあらゆる情報を得て戦いに臨んだ私の勝ちだ。相手の力量も測らずに愚かにも挑んだ猪武者との格の違い、よく理解できただろう？心配しなくても雨牙真夜は必ず救い出す。だからおまえはしばらく寝てろ」

ゆっくりとトリガーを引き絞ろうとするも、真夜の次の言葉にその指は止まった。

「確かにね。でも・・・おまえは一つだけミスを犯した」

「・・・何？」

「それはね、戦場にニューヨークを選んだことよ！」

突如サイレンの音がアルガティアの耳に届き、赤色灯を屋根に付けた白と黒の車両が何台も目の前で次々と到着する。言うまでもなく警察車両だ。後方にも到着し、警官が即座に拳銃を構え、配置に着く。突然警察が現れたことに宙であわあわとなっていた口モモは即時に煙を発してペンダントに変わった。

「なっ!?!これは・・・っ!?!」

しばらくして口髭の見える年配の警部補らしき人物が拡声器を手に持って大声で伝えた。

「そこまでだ!凶悪犯に告げる!速やかに人質を解放し、武器を捨てて投降せよ!繰り返し!速やかに人質を解放し、武器を捨てて投降せよ!」

「凶悪犯?私が!?!」

その言葉に、さしものアルガティアも表情が蒼白になる。それが隙となり、今度は真夜に余裕を与えた。関節を撃たれた左腕を気力で振り絞って伸ばして敵の左腕を?むと、黒い邪気が発生して双方の腕を拘束し、黒い手錠に変わる。

「!・・・何の真似!?!」

「あんまり暴れないほうがいいわよ。下手したら爆発するから」

「!?!」

「この手錠はね、私の意志によって爆発するシステムになってるの。」

もし無理にでも外そうとしたり、壊そうとしたら即座に私が爆発のスイッチを押すわ。そうね、あなたのその左腕一本確実に身体から離れるわね」

「それを言うんだったら、おまえも・・・っ！」

「ええ、そうよ。でも、私は『普通』の身体をしてないからね。けど、射撃手^{ガンファイター}にとって腕は命同然でしょ？」

「っ・・・！！」

「あと、この警察もあなたが私の僕を相手している時に万が一のために呼んでおいたの。『無茶苦茶に銃を乱射している危ない女の子がいます、早く来てください』ってね。変身が解かれて無抵抗でいる私と何の武器も持っていない一般市民に銃口を押しつける少女、さてさて警察はどっちが悪い人と見るでしょう？」

「ひ・・・卑怯者ッ！おまえ、それでもプリキュアなのか!？」

アルガティアがその台詞を吐くと、真夜^{リベリオン}は待つてましたとばかりに歪んだ微笑を浮かべた。

「褒め言葉どうも でも生憎と、私は『悪』のプリキュアなんでね。大切なものを助けるためなら、私はいくらでも悪魔になってやるわよ。これ以上厄介は御免でしょ？私と口モモを連れて行くと約束したら、警察は私があるとかするわよ。おまえが押しつけているこの真っ赤な右目を使ってね・・・」

「く・・・！！」

こいつ、自分をも囷にして私を眼に嵌めたのか。なんて用意周到な・・・っ。

アルガティアが齒噛みしていると、真夜^{リベリオン}は微笑を消し、催眠能力のない闇い^い左目の瞳を静かにゆらめかせた。

「私を撃つなら撃つてみなさい、撃てるものならね。その前にこの手錠を爆発させて二度と拳銃を持ってなくするかもしれないし、それ以前にここで私を射殺したら、途端に警察との銃撃戦が始まるのは明らかよ。仮に逃げられたとしてもあなたの顔は警察に覚えられた。その後は逃走中の凶悪犯として指名手配されるでしょうね。プリキ

ユアとして経歴に傷をつけたくないでしょ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あなたの選択は二つ。私とともに死ぬか、私とともに生きるかよ
！！」

「・・・・・・・・く・・・・・・・・くつつそおおおおおツツツツ
！！！！」

屈辱に堪えきれなくなったアルガティアの咆哮が上空に木霊した。その後、紅の右目から拳銃を離れたアルガティアは約束どおり催眠で即座に記憶を消して警察を引き上げさせた真夜リペリオンのおかげで無事凶悪犯にされずに済み、計画変更の旨を通信で仲間に伝えると、彼女と手錠で繋がれたまま、ミラクルライトに光を灯らせ、口モモも含めて『永遠の楽園』へと旅立ったのだった。

同刻。日本。

「『プランB』に変更と、アルガティアから連絡だ」

「そう、やむをえないわね」

通信を切って天上刹那が伝えると、天宮唯は小さく吐息をした。ふたりがこれから行うのは力量の測定。世界を何度か滅亡から守ったと経歴があれども少しでも粘りを見せてもらわなければ、ただの足手纏いになる。少なくとも『獵犬』としての技量を発揮してくれることを祈る。存在だけで世界を滅ぼす最強の敵『幸福』を狩るための『獵犬イヌ』は多いほうがいい。

そう考えに至り、ふたりの少女は雑木林の中から奥を覗き見る。

23人の少女たちが広場で幸福な時間を過ごしていた。

次回予告

幸せなひと時をともに過ごす23人の少女たち
しかし、その時間は一瞬にして打ち破られる

次回『機動兵器』

幸せな時間を壊されたことに怒り、少女たちは変身する

選択（後書き）

お待たせしました。新たにふたり加わった彼女たちが登場です！

機動兵器

晴れ渡る澄み切った青空。陽の光を浴びて緑の枝葉が瑞々しく煌く。

そよ風を爽やかに感じながら、23人の少女たちが草原の上で微笑ましく弁当を食べ合っていた。

「わゝ、その唐揚げ美味しそうだね、ほのか!」

「欲しいならあげるわ、なぎさ」

「マジ!? やったあ! サンキュー、ほのか!」

「なぎささん、この玉子焼きも食べてみてください」

「おおっ、美味い! これひかりが作ったの?」

「はい! アカネさんに教えてもらって一生懸命作りました!」

「凄いよ、ひかり! 頑張ったじゃん!」

「ありがとうございます!」

「ねえ舞、そのハンバーグもらっついていい?」

「いいわよ、咲」

「ありがとうございます、舞! じゃあ代わりにこのサンドイッチあげる!」

と、ふたりの大食漢の少女がおかずのとりかえっこをした一方で、

「うわあゝ、美味しそゝ。ねえりんちゃん、そのタコさんウインナ

ー私にちよーだい」

「何言ってんの? のぞみのお弁当にもウインナー入っ込んでしょーが」

「だっ तरीんちゃんの作ったタコさんウインナー、とっても美味しそうなんだもん。ダメ?」

「・・・はあゝ、もうしょーがないなあ」

「ありがとう、りんちゃん」

「のぞみさん、私のカレーも食べてみてください!」

「え? うらら、お弁当にカレー作ってきたの?」

「はい」

「うちらはどこ行ってもカレーだねえ……ところでこまちさん、そのお弁当何なんですか？」

「羊羹よ」

「いや、それは見れば分かりますって！なんでお弁当に羊羹が入ってるんですか？それもぎっしり！」

「あら、とても美味しいわよ」

「ああ、そうですね……で、かれんさん、そのお弁当は何なんです？」

「キャビアにフォワグラよ」

「いくらセレブだからって、ピクニックのお弁当に高級食材入れる人がどこの世界にいるんですか！？」

「ちよっとうるさいわよ、りん。せつかくのお弁当が楽しくないじゃない」

「ちやつかりキャビアやフォワグラをいただいているあんたが言うな、くるみ！」

と、まあなんだかんでワイワイガヤガヤしていた。

「……ラブ、あんたひよっとしてお弁当にドーナツ持ってきたの？」

「そのとーり！もうピクニックのお弁当にドーナツは必需品！」

「あんたが食べたいだけでしょーが！」

「まあまあ、それより美希ちゃんのお弁当凄く美味しそうだし、見かけもいいわね。これ、美希ちゃんが作ったの？」

「まあね そりゃなんでも完璧を目指す私だもん。お弁当作りも完璧じゃないとね」

「さすがね。でもせつなちゃんのお弁当もよくできてるわね。せつなちゃんも自分で作ったの？」

「あ……私は一応ひとりで精一杯頑張ろうしたんだけど、途中で瞬と隼人も手伝っちゃって……一応三人の合作なの。どうかしら？」

「ううん、凄くいいと思う。ふたりに感謝しないとね」

「ありがとう、ブッキー」

と、こちらも微笑ましくしている一方で、

「ちよ、えりか！勝手に私のエビフライ取らないでください！それ、最後に食べようと思っていたんですから！」

「ありゃ、そーなの？でもまあいーじゃん。代わりに私のコロッケあげるからさ〜、つぼみ」

「食べかけなんていりませんよ！」

「えりか、人の嫌がることしちゃダメだよ」

「大目に見てよ、いつき。私とつぼみは超が付くほどの大親友なんだからさ〜」

「それとこれとは別問題ですよ、えりか〜・・・」

「ちよ、泣くことないじゃん、つぼみ」

「えりか、あなた今自分が何をしたのか分かっているの？」

「ゆ・・・ゆりさん？」

「あなたは軽い気持ちでやっただけかもしれないけれど、人の楽しみを取るということはその人の幸せを壊すということになるのよ。至福のひと時を人から奪つといて、あなたは何も感じないのかしら？」

「え・・・や・・・そんな大袈裟な。私、そんなつもりで・・・」

「人の幸せを壊す行為に大袈裟も何もないわ。そんなつもりで取っただんじやないんなら・・・今すぐつぼみに返しなさい！」

「は・・・はい（怖ッ！）」

一人だけ高学年の少女の睨みに、彼女だけでなく、他のふたりも思わず震えあがった。

「うわっ、凄いよエレン。このお弁当、エレン一人で作ったの？」

「ええ、そうよ。響たちも食べてみる？」

「えっ、いいの？」

「もっちろん・・・それで、どう？」

「凄い・・・美味しい。私より上手かも」

「ありがとう、奏。最高の褒め言葉よ」

「でも一体どうやって・・・？」

「そ・れ・は・ね、音吉さんの本で勉強したの！」

「・・・へ、へえ、そうなんだ（音吉さんの趣味って、一体・・・）」

「（やっぱり、お祖父ちゃんからか・・・）」

「え？何か言いました？アコ姫様」

「『姫様』はやめて」

と、四人の中で最も最少年の少女が返したところで、そろそろ彼女たちを紹介するでしょう。

ここにいる23人の少女たちは全員、かの伝説の戦士と呼ばれるプリキュアだった。彼女たちはこれまでにも全てを滅びや不幸、悲しみや絶望で包み込もうとしてきた闇の脅威と何度も戦い、時にはどうしようもないほどの危機に迫られてもあきらめずに踏ん張り、世界を守ってきたのである。数ヶ月前には全ての世界を繋ぐという希望の花・プリズムフラワーをこれまで倒してきた組織の邪悪なエネルギーが宇宙で融合して誕生した邪悪の神ブラックホールから死守した経歴も持つ。

しかし、あの戦いは彼女たちにとって少々苦い過去でもあった。というのもブラックホールが僕として送り込んだ敵たちの中にはかつて自分たちと和解した者もいたからである。闇の世界の魔女、フリーズンとフローズン、サーロイン、シャドウはともかく、最後には改心してくれたムシバインやトイマジン、サラマンダー男爵までもが再び敵として立ちはだかったのに彼らと一度拳を交えた夢原のぞみ、桃園ラブ、花咲つぼみは複雑さを隠し切れなかった。一応彼らを浄化した際にまだ残っていた邪悪な心をブラックホールが吸収し、同じ姿形で蘇らせた全くの偽者コピーと彼ら自身が説明してくれたが、それでも二度も戦いたくなかったと彼らを再度倒した三人は今も感じている。

また、彼女たちと多くの時間を過ごしてきたパートナーの妖精たちと永遠の別れを強いられたのもそうだった。僕たちを倒され、遂に姿を見せたブラックホールの猛威によって全員変身が強制解除さ

れたうえにプリズムフラワーが壊滅寸前にまで追いやられたのである。再び変身してブラックホールと戦うにはわずかに残されたプリズムフラワーの力を使うしかない。けれどそれを選べば最後、プリズムフラワーは完全に消滅して世界を繋ぐことが不可能となり、妖精たちはプリキュアたちがいるこの世界から強制退去され、二度と会えなくなるのだ。究極の選択に相当な苦悩をするも、離れていても自分たちと妖精たちは心で繋がっていると確信、ブラックホールの手によって世界を暗黒に染められるくらいなら、と彼女たちはプリズムフラワーに残る最後の力を使用することを選び、その光を浴びて再びプリキュアに変身した少女たちはそれぞれの必殺技を駆使して遂にブラックホールを撃破、妖精たちと永遠のさよならをした。……はずだった。

ところが奇跡が起こった。消滅したプリズムフラワーが種を残し、その種が花を咲かせ、再び世界を繋いだのである。プリキュアたちと妖精たちは涙の再会を遂げ、これからもずっと一緒といられるこの喜びに感謝した。今の時間も妖精たちは彼女たちのそばで楽しくランチしたり、仲良く遊んでいる。そんな彼らの様子を一瞥して北条響は、くす、と微笑し、来てよかったなと本当に思った。

今日は響たちが他のプリキュアたちとも時間を過ごせる数少ない日。前々から計画していたピクニックの日だった。各メンバーで同日同時刻同場所に集合、全員で話し合った末に決めたこの丘から眼下に町が見える景色を楽しみながらお弁当を食べ、その後は自由時間として仲良く遊んだりする予定で、響と親友の南野奏はもちろん、新しくプリキュアに仲間入りした黒川エレンと調辺アコも連れてきていた。

黒川エレンはもとは幸せの音楽の国・メイジャーランドの歌君だったが今年の歌君に親友且つライバルでもあるハミイが選ばれたことに不満を覚え、世界を不幸の悲しみで沈めようと企む悲しみの音楽の国・マイナーランドに寝返ったセイレーンというペルシャ猫に似た妖精であり、かつては響たちの敵として戦っていたが改心、さ

らにはプリキュアの力も授かり、ともに戦うのを決めたのだ（ちなみに彼女は過去の罪からか、今やセイレーンの名で呼ばれるのを嫌っているが、ハミィにだけはその名で呼ばれるのを許している）。

もうひとり、調辺アコは9歳の小学三年生という、中学一年生の九条ひかりと春日野うららよりも四歳も年下という彼女たちの中では最年少とそれだけでも驚くのだが、実はメイジャーランドの女王・アフロデイトと真の黒幕・ノイズに操られていた元マイナーランド国王・メフィストの娘に当たるお姫様であり、ノイズの脅威から響たちの暮らす加音町に逃げてきたのだが、悪行を繰り返す父を助けたいと想いからプリキュアの力を授かり、ともに戦うのを決意したのだ。現在では父親をノイズの洗脳から救出、来るべきノイズとの戦いに備え、プリキュアとして響たちとともに世界を不幸から守っている。

ちなみに初の小学生プリキュアの登場に、自分よりも歳が下のひかりとうららよりも背が低いのを気にしていた来海えりかは嬉々とし、彼女と「まあ〜一応最年少でなことで何かとプレッシャーを感じるかもしれないけど、ここはひとつよろしくね!」「べつにプレッシャーなんて感じてないわよ。それよりも先輩気取って馴れ馴れしくして・・・よく人に嫌われないのが不思議ね」「なにをおっつ、弟子入りするかこのこのっ!」と頬をつねながら挨拶を交わしたとかなんとか。

「それにしてもさ、本当に今日は晴れてよかったね!こうして『全員』で会うのなんて滅多にないからね!」

お弁当を食べ終わった後、美墨なぎさ、日向咲、のぞみ、ラブ、つぼみ、えりかとバレーボールをしていた響だが、『全員』という言葉聞いた途端に彼女たちの何人かが困ったような笑みを浮かべているのに気づいた。

「?・・・何?私、何かまずいこと言った?」

「いや、そうじゃないんだけど・・・」

「響さんは会ったことないのでしょうがないのですが、実は私たち

の他にあと一人だけいるんです」

えりかの後につばみが説明すると、響はキョトンとなった。

「へ？みんなの他にもう一人・・・？」

「はい。私たちはその人と二回だけなのですが、一緒に戦って世界を守ったことがあるんです」

「へえ・・・その人は今？」

「今はニューヨークで頑張っています」

「ニューヨーク・・・はあく海外で暮らしているなんて凄いね。その人、名前なんて言うの？」

「雨牙真夜さんといいます。プリキュアとしての名前はキュアセイバーです」

「キュアセイバー・・・？」

はて、その名前、どこかで聞いたことがあるような・・・？

「一回会ってみたいね、その人に」

「まあニューヨークに住んでいるのですから、そう簡単には会えませんが、きつといつか会えますよ。友達なんですから！」

「そうそう！その時には響たちのことも紹介するって。でも今日はせつかくひさしぶりに会ったんだしさ、ドドーンツと、楽しもうよ！ドドーンツとさー！！」

えりかがそこまで言った時だった。

ドドオオオオンツツツ！！！！

「そうそう！こんな感じに・・・え？」

突然の背後からの轟音。瞬間に波打つ地面。妖精たちはもちろん、明らかに驚愕の反応をしている仲間たちの顔を見て、えりかは嫌な予感が100パーセントしてギギギと、首を人形の動きの如く後ろにねじった。

「な・・・な・・・なんじゃこりゃああああああっつつつつ！
!?!」

そこにあつたのは、二足歩行する巨大な機械^{マシン}だった。全高は約5メートル以上、薄茶色の鋼鉄に覆われ蒸気が至る所から噴出している箱型の機体からは六の義手が伸び、あろうことか少し大きめの拳銃や剣が握られている。機体を支えている二足はなぜかバツタの後脚に似てて、爪先で歩いてきた。それ一機だけでも十分驚愕するのにさらに五機、頭上から降下してきたのである。突如現れた謎の機械はある程度蒸気を噴き出すと、少女たちに全ての銃口を定めた。

「みんなよけて！」

響が一番に発し、全員急いで弾丸の雨を回避する。草原に砂と土の噴水が次々に舞い上がり、突然の事態に妖精たちも驚き、急いで彼女たちに飛び込んだ。

「なぎさ、何事メポ!?!」

「私を知るわけないじゃん! あんなのぶっちゃけありえないっつ
!?!」

「つぼみ! これは一体何が起こったですう!?!」

「シプレ!・・・分かりません。けど今は危険です! どこか安全な場所へ・・・!」

「ピーチはん! あいつら一体何なんや!?!」

「私のほうが知りたいよ、タルト! あゝっもう! せっかくみんなで幸せゲットしてたのに! っ!」

ラブのその台詞に、響・奏・エレン・アコの四人が反応した。

「そっだよ! 今日はせっかくみんなでひさしぶりに集まった大事な日だったんだよ!」

「みんな今日という日をとつても楽しみにしていた!」

「それを突然現れて・・・」

「みんなの幸せを壊すなんて!」

「!?!?! 絶対に許せない!?!?!」

その気迫に、五機の機体が停止する。23人の少女たちは全員幸

福の時間を壊された怒りを瞳に宿し、それぞれ妖精が姿を変えたものの、普段から携帯しているものをすぐさま手に持つ。響は背後に立つ仲間たち呼びかけた。

「みんな、変身よ！」

「……………うん！！！！」

その返事を聞いた直後、全員がアイテムを起動させて大声で叫んだ。

「……………レッツプレイ！プリキュア・モジュレーション！！」

「……………デュアル・オーロラ・ウェイブ！！」

「……………ルミナス！シャイニングストリーム！」

「……………デュアル・スピリチュアル・パワー！！」

「……………プリキュア！メタモルフォーゼ！！」

「……………スカイローズ・トランスレイト！！」

「……………チェインジ！プリキュア！ビート！アアアップ！！」

「……………プリキュア！オープン・マイ・ハート！！」

まばゆいばかりの閃光が23人の少女たちを包み、衣装を施して姿を変えていく。

響はマゼンダを基調とした衣装にピンクのツインテール。奏は白を基調とした衣装に艶やかなレモンイエローの長いポニーテール。エレンは青を基調とした衣装に淡い紫のサイドポニーに羽のような髪飾りが施されて長く束ねられる。アコは黄色を基調とした衣装に額に赤いハートのヘアアクセが施され、髪は両側に分かれたオレンジの長髪に変わる。

なぎさは黒を基調とし、桃の装飾をあしらった短いスカートとスパッツ。雪城ほのかは白を基調とし、青の装飾をあしらった膝丈のスカート。ひかりは鮮やかな桃の布地と金色の衣装を施した衣装。

咲は赤紫色を基調とした衣装とスパッツ。美翔舞は銀白色を基調とした衣装とスカート。

のぞみ・夏木りん・うらら・秋元こまち・水無月かれんは襟の立った二の腕までの袖に短いスカートの下にスパッツが見える桃・赤・

黄・緑・青の衣装。くるみは胸に青い薔薇が付いたりボンが施された紫の衣装。

ラブ・蒼乃美希・山吹祈里・東せつなはフリフリの衣装とスカート、髪飾りにイヤリングが裝飾された桃・蒼・黄・赤の衣装。

つぼみ・えりか・明堂院いつきは花を象徴するように開いたスカートとブーツ、胸にハート型のエンブレムが裝飾されたりボンが結ばれた桃・青・金を基調とした衣装。月影ゆりは前から後ろにかけて長くなるスカートと左胸に青い薔薇があしらわれた藤色を基調とした衣装。

光が消えると、『変身』を遂げた23人の少女たちがポーズを取り、順に名を名乗っていく。

「爪弾くは荒ぶる調べ！キュアメロディ！」

「爪弾くはたおやかな調べ！キュアリズム！」

「爪弾くは魂の調べ！キュアビート！」

「爪弾くは女神の調べ！キュアミューズ！」

「……届け、四人の組曲！スイートプリキュア！」

「光の使者、キュアブラック！」

「光の使者、キュアホワイト！」

「ふたりはプリキュア！」

「闇の力の僕たちよ！」

「とつととおウチに、帰りなさい！」

「輝く命、シャイニールミナス！光の心と光の意思、全てをひとつにするために！」

「輝く金の花！キュアブルーム！」

「煌く銀の翼！キュアイーグレット！」

「ふたりはプリキュア！」

「聖なる泉を汚す者よ！」

「アコギな真似はお止めなさい！」

「大いなる希望の力！キュアドリーム！」

「情熱の赤い炎！キュアルージュ！」

「はじけるレモンの香り！キュアレモネード！」

「安らぎの緑の大地！キュアミント！」

「知性の青き泉！キュアアクア！」

「希望の力と未来の光！華麗に羽ばたく5つの心！Yes
プリキュア5！」

「青い薔薇は秘密の印！ミルキイローズ！」

「ピンクのハートは愛ある印！もぎたてフレッシュ！キュアピーチ
！」

「ブルーのハートは希望の印！つみたてフレッシュ！キュアベリー
！」

「イエローハートは祈りの印！とれたてフレッシュ！キュアパイ
ン！」

「真っ赤なハートは幸せの証！熟れたてフレッシュ！キュアパッシ
ョン！」

「レッツ！」

「プリキュア！」

「大地に咲く一輪の花！キュアブロッサム！」

「海風に揺れる一輪の花！キュアマリン！」

「陽の光浴びる一輪の花！キュアサンシャイン！」

「月光に冴える一輪の花！キュアムーンライト！」

「ハートキャッチプリキュア！」

「全員集合ッ！プリキュアオールスターズ！」

23人の伝説の戦士、プリキュアが最後にその声を合わせて決
めると、神々しい光が一瞬だけ煌き、すぐに周囲に弾けた。

「あれ何なの？あんなの連れてきていたなんて聞いてないわよ、刹那」

「かつて独立治安維持部隊アロウズが使用していた対人用無人機動兵器だ。私たちの世界の『花咲つぼみ』と『明堂院いつき』が『夢原のぞみ』に攻撃に使用したものを回収、独自に改造して進化させた。その時あなたはその場にいなかったから知らないのは仕方ない」

「・・・なぜ、彼女たちに？」

「一次試験よ。この程度で倒れるようなら私たちと戦う資格もない。大丈夫。拳銃は30・M1カービンのメタルジャケットで腹部を狙うようにシステム化しているし、弾丸はスパイヤーポイントで、低速で発射されて回転しながら敵を撃つものを装填している。腹部を撃たれても死に至ることはないから安心して。無論、相当の痛みに苦しむけれどね」

「（・・・鬼ね、この人）でもまあ、一応準備はしたほうがよくない？」

「そうね」

そう言っつて、ふたりの少女は雑木林の中で変身コードを唱えた。

「プリキュア・リボーンズ・イノベーション！！」

「プリキュア・セラフィック・アドベント！！」

次回予告

謎の機動兵器と激闘を開始する23人のプリキュアたち

突然の強敵に、彼女たちは勝利できるのか

次回『奮迅』

彼女たちの絆は、そう脆くない

機動兵器（後書き）

ひさしぶりでしたけど、やっぱり歴代の中でえりかは一番書きやすいです。

奮迅

まずブラックとブルームが突撃し、渾身の一撃を薄茶の機体に叩き込んだ。

しかし、ふたり分の鉄拳に鋼鉄の機体はびくともせず、地上に降りたブラックとブルームは赤く腫れあがった手をぱたぱたさせた。

「痛あゝっ！」

「なんて硬いのよ、あいつ！」

すると、ホワイトが機体を支えて爪先で歩く二足に気づいた。

「・・・あの足を攻撃したらどうかしら？」

「そうだわ！あんな爪先立ちで歩いている足を攻撃すればきつとバランスを崩して倒れるはずだわ！」

イーグレットもホワイトの意見に賛成する。

「やってみる価値はあるわね。行くわよ、イーグレット！」

「ええ！」

ホワイトとイーグレットが駆け出し、身体を高速回転させながらダブルスクリーキックをお見舞いさせようと跳躍の準備をする。ところが準備をする直前、機体がふたりの視界から消えたのだ。

「えっ！？」

あんな大きなものが一体どこに？と探していると、突如頭上を巨大な影が覆い、ふたりは急いで上を見やる。見ると、あの機体がいつの間にやらふたりの頭上に降ってくるではないか。予想外の空間から出てくると思ってもいなかったホワイトとイーグレットは悲鳴をあげてすぐにその場を回避、間一髪で機体の下敷きにならずにすんだものの、地上に降り立った時の衝撃と粉塵で軽くだが身体が吹き飛ばされた。

しかし、次の瞬間には全員目が丸くなった。爪先立ちの二足を活かして機体がぴょんと、跳んだのである。ちよつとでも突けば倒れてしまいそうなああの爪先立ちはそのためだったのかとホワイト

が気づいた時には機体は四人から少し距離を取った位置に着陸、三の義手が握る拳銃から無数の弾丸が撃たれた。

「はあっ！」

急ぎルミナスが絶対防御の虹色のバリアを張り、弾丸から仲間を守る。撃った数だけ弾丸が地にこぼれていく音が響き、機体は無駄だと悟ったのか、剣の刀身を煌かせて接近、正面から垂直に刃をバリアに斬り込んだ。

「く・・・っ・・・！」

バリアを通して衝撃がルミナスの身体に伝わり、わずかに表情が歪む。バリアは何度も叩かれ、遂に耐えきれずに亀裂が入り、すぐに粉碎した。

「くくくくきゃあああああああああああああつっつっつ

！！！」「！！！」

バリアが破壊された衝撃を受け、五人の身体が空高く吹き飛んだ。一方、プリキュア5も機体相手に苦戦を強いられていた。レモネードがプリズムチェーンで巨体を束縛して動きを止め、アクアがサファイアアロー、ミントがエメラルドソーサー、ルージュがファイヤーストライクを次々に発動させて炸裂するものの、機体は傷一つも付かない。それどころか剣を振り回してレモネードの束縛から逃れると、銃を乱射、直撃はしなかったものの衝撃で四人を草原に撃墜した。

「はあっ！」

「このっ！」

ドリームとローズによる拳と蹴りの連続打撃が機体に次々と叩き込まれる。特にローズは単独でもプリキュア5以上のパワーを発揮するのだが、彼女の渾身の打撃を受けてもやはり機体は一步も後退することなく、振り上げられた義手にふたりは逆に弾き飛ばされ、地上に激突した。

「くきゃあああっ！！！！」

振り下ろしざまに発生した突風を受けてベリーとパインが悲鳴を

あげて吹き飛ぶ。飛ばされたふたりに目を向けて名前を呼んだ。ピーチは途端に銃口が自分に定められているのに気づかなかった。

「ピーチ！」

即時に走り出して体当たりし、彼女を庇ったパッションだったが代償として撃たれた弾丸が腹部を貫通して倒れた。

「パッション！しつかりして！」

「大・丈夫よ」

ピーチの腕に抱えられたパッションは彼女に笑いかけるもやはり激痛が相当のものらしく、痛みに歪んだ笑みとなっていた。かつては家族同然に暮らしたこともある親友を傷つけたことにピーチの怒りの火山が噴火した。

「よくもパッションをおっ！！」

パッションを降ろして瞬時に機体上空へと跳躍したピーチはそこで宙返り、踵かかとに全力を込めて乙女の怒りを思いつき叩き込んだ。

一瞬、機体のバランスがぐらついたように見えたが倒れずには至らなかった。すぐに義手がピーチに急迫し、彼女を真下へと叩き潰した。

「ブロッサム・スクリューパンチ！」

「マリン・インパクト！」

「サンシャイン・フラッシュ！」

ブロッサム、マリン、サンシャインによる特殊技が次々に機体に直撃する。プリキュアの中では最も特殊攻撃に長けているチームであるが、それでも機体は平然と蒸気を噴出している。歴代最強とさえいわれているムーンライトも鉄拳や蹴りといった打撃を叩き込みさらには『ムーンライト・シルバーインパクト』と衝撃波を与えて爆発を起こしたが、機体は全く倒れず、四人はとも信じられなかった。それどころか剣の一振りで発生した突風に飛ばされ、背中を嫌というほど強打した。

幾多の激闘を繰り広げてきた先輩たちでさえも苦戦しているのに新参者のメロディたちが善戦しているわけがなく、

「ビートソニック！」

ビートが専用武器・ラブギターロッドを鳴らして光の音符の矢を撃つたり、ミューズが空間に虹色の鍵盤を召喚してエネルギーを飛ばしたがり効かず、

「プリキュア！パッションオートハーモニー！！」

ハート型ト音記号からひさびさにリズムと心を合わせた金色の閃光波を発射するも全然通用せず、反射神経を活かした二足による体当たりをまともに受けて倒れ、表情が激しい苦痛に歪んだ。

「・・・何あの様。少しは期待していたのに全然じゃない。時間の無駄だった。戻ろう」

「オートマトン、ほうっておいていいの？」

「戦闘対象は私たちを除いたプリキュアのみに指定している。もし変身が解除されれば対象が一般市民に変わるから、撃つたりはしない。しかし、一応救急車を呼んであげるとするか」

携帯を手取る彼女だが、すぐにその手を止められる。

「?・・・どうした？」

「もう少し待ってほしい。別世界でも彼女たちもプリキュア・・・失望するのはまだ早計と思う」

「しかし・・・」

その時、強い闘気を感じし、ふたりの少女は振り返った。

幾度となく飛ばされ、苦痛に歪んでも、少女たちは何度も立ち上がった。

全員が気迫に満ちた表情をし、壮絶な闘気オーラを飛ばす。

その闘気は『想い』。幸福の時間を破壊された怒り、もう一度時間をともに過ごしたいという願い、だから絶対に負けられないプリキュアとしての矜持が力を与えている。その気迫に気圧されたのか、

五機の機体がほんの一瞬だけ動きを止めた。

「たああつ！！」

ありつたけの『想い』を力に変えてブラックとブルームの一撃が再び決まる。一撃目はびくともしなかつた機体が二撃目ではぼつこりと跡が残るほどへこみ、初めて後退を見せた。その機会を見逃さず、ルミナスとイーグレットが爪先立ちの二足に跳び蹴りを与える。衝撃を受けてわずかにぐらついた機体を

「やああつ！！」

両腕に力を集約したホワイトが一足を？み、5メートル以上の機体を宙に浮かす。そこから先は言うまでもなく地面に撃墜した一機にブラックはホワイトと、ブルームはイーグレットと片手を繋ぎ、もう片方に力を溜めた。

「ブラック・サンダー！」

「ホワイト・サンダー！」

天から黒と白の雷がふたりの手に集められ、増強されていく。

「プリキュアの、美しき魂が！」

「邪悪な心を打ち砕く！」

「プリキュア！マーブルスクリュー！マックス！！」

最大限にまで増強した黒と白の雷が螺旋を描いて混じり合い、融合して機体に激突する。

「大地の精霊よ・・・」

「大空の精霊よ・・・」

ブルームとイーグレットも目を閉じてそれぞれ地面と空に宿る精霊の光を片手に集め、力へ変えていく。ふたりは目を開けた。

「今、プリキュアとともに！」

「奇跡の力を解き放て！」

「プリキュア！ツイン・ストリーム！スプラアアッシュュ！！」

二つの光が水流の如く混合し、一つの光線となって突撃する。二つの光線を受けた機体は当初こそ耐えていたが、徐々に全体が光に覆われて遂に爆発した。

プリキュア5のメンバーも反撃に生じていた。機体に個人技が通
用しないならせめてと、再びレモネードがプリズムチェーンで動き
を止め、ルージュ、ミント、アクアが今度は機体ではなく、義手
が握る武器を狙ってもう一度技を発動させる。これは成功し、暴発
を起こした拳銃や剣は炎の花を盛大に咲かせ、使用できない状態に
した。そこに

「邪悪な心を包み込む薔薇の吹雪を咲かせましょう！ミルキイロー
ズ・ブリザード！！」

ローズが起こした花吹雪に包まれて一輪の巨大な薔薇の中に封じ
られた一機は、

「プリキュア！シューティングスター！」

自身を流星と化せたドリームの光速アタックに撃破され、消滅し
た。

ピーチたち四人はスタンディングスタートの体勢を取り、「レデ
イ・・・ゴー！」のかけ声と同時に順に走り出す。

「ハピネスリーフ！セット！パイン！」

「プラスワン！ブleaリーフ！ベリー！」

「プラスワン！エスポワールリーフ！ピーチ！」

「プラスワン！ラブリーリーフ！」

それぞれが走りながら生み出しては投げ、桃・青・黄・赤の四色
のクローバーを完成させると、ピーチが機体に向けて投げ、締めを
括る。投げられたクローバーは回転しながら巨大化すると、一機を
頭上から降下して全体の動きを封じる。

「・・・ラツキークローバー！グランドファイナーレ！！」

それぞれ自身を象徴する色の葉の上で四人が手を挙げて叫ぶと、
クリスタル状の透き通った物体が一機を中に封じ、完全消滅をした。
「花よ輝け！プリキュア！シルバーフォルテウェイブ！」

エンブレムから専用武器・ムーンタクトを召喚し、ムーンライト
が銀の花弁エネルギー弾を発射、エネルギーは機体の二足に衝突し、
バランスを崩して倒れた。

「プリキュア！ゴールドフォルテバースト！」

サンシャインがシャイニータンバリンで頭上に灼熱の太陽にも見える光のゲートを作りだすと、

「プリキュア！フローラルパワー・フォルティシモ！！！」

フォルティシモ記号を描いた後にフラワータクトの先端を合わせて光を纏ったブロッサムとマリリンがそのままゲートに突入、全身を黄金に染めてさらに増強化すると、

「プリキュア！シャイニング！」

「フォルティシモ！！！」

立ち上がれない一機に激突・貫通して撃破した。

次々に敵を撃破する先輩たちの活躍に後輩も負けてられない。メロディたちも残った最後の二機に反撃に出た。

「プリキュア！スパークリングシャワー！」

ミュージックが変身アイテムでもあるキュアマジューレの笛を吹いて大量の音符を周囲に召喚、一気に飛ばしてひるませると、

「プリキュア！ミュージック・ロンド！！！」

「プリキュア！ハートフルビートロック！」

専用武器・ミラクルベルティエとファンタスティックベルティエを召喚したメロディとリズム、ラプギターロッドのボディをヘッドまで移動させてソウルロッドに変形させたビートによる三重の光のリングに束縛された最終機は、

「三拍子！1・2・3！！！」

三人同時に振り返ると、

「ファイナーレ！！！」

のかけ声と同時に光芒と爆発に吞まれた。

戦いは、なんとか勝利で終わった。

しかし、突如現れた謎の機体にプリキュアたちはもちろん、離れて見守っていた妖精たちも状況を喜べず、むしろ不安な気持ちが一

層強まった。

「あのロボットみたいなの、一体何なのニヤ？」

開口一番にハミイが聞く。

「分からないナツ。今まで見たこともないどころか、明らかに『普通』じゃなかったナツ」

「なんだか嫌な予感がするココ。もしかしてまた世界を変えてしまふような恐ろしいことが起きようとしているかもしれないココ・・・」
ココが不吉な予想をすると、

「その通りよ」

突然プリキユアたちの頭上に立方体の何かが投げ込まれ、強い閃光が炸裂し、全員の視界を奪った。

「うわっ！」

しばらくしてメロディは恐る恐る瞼を開く。「えっ？」と声が出た。

そこはさつきまでの草原ではなかった。例えるならイタリアのコロッセオで有名な闘技場に似た空間が目の前に存在し、周囲の3メートル以上の壁の上に誰もいないが観客席が見えた。

「メロディ！」

どうしてこんな場所に？と疑問に思っていると、背後から名前を呼ばれてすぐにリズムの顔が瞳に入る。リズムの他にビート、ミューズもいて、メロディは自分一人だけじゃなかったことに少し安心した。しかし、彼女たち以外の仲間の姿は誰も見えない。一体何がどうなっていると混乱が感染すると、

「！・・・メロディ、リズム、ビート！あそこ！」

ふと、ミューズが指を差した。

そこに少女がふたり、見える。さつきまで一緒にいた仲間の誰でもないのは明らかだった。

ひとりには青と白を基調とした衣装を着、背中に『？』に似た大きな翼が生えている。

もうひとりは西洋の誇りある騎士がそのまま天使に転生したよう

な、長い金髪の白を基調とした衣装を着ている。

「誰・誰なの？」

思わずメロディが聞くと、ふたりの少女はこう返事を返した。

「破壊と再生の天上人・・・キュアエクス」

「悪しき者を断罪する破邪の極光、キュアセラフ！！」

次回予告

23のプリキュアたちの前に現れた新たなふたりのプリキュア
混乱のまま、プリキュア同士の戦いが無理やり開始される

次回『天上人（前編）』

この戦いに、彼女たちは何を見い出すのか

奮迅（後書き）

エクスとセラフ、登場です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1030y/>

プリキュアオールスターズDX 3 Revival 導いて！幸福の成す奇跡

2011年11月6日03時05分発行